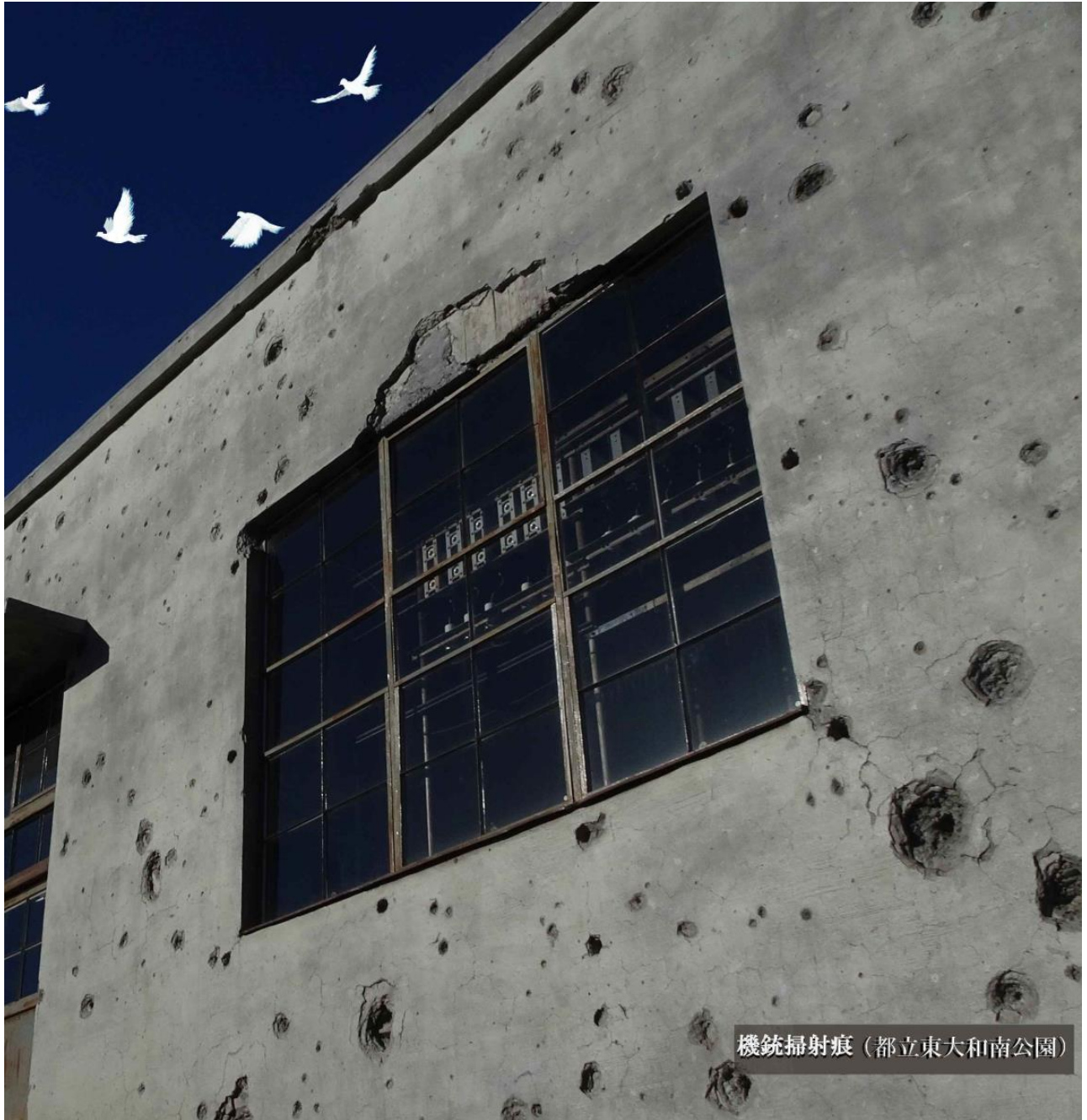


月刊
JMITU

アノコトカ

新型コロナ対応版



機銃掃射痕（都立東大和南公園）

12月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガグループ分会 2022年発行

No.456

新たな成果主義？

報酬のあり方を改め月給給料の見直し？

11月にセガ全社集会が行われました。上期の総括、トピックスなど経営側から話されました。

その中で下期トピックスの中に「マーケットの変化に即した採用競争力強化を図るうえで、報酬体系の見直しを検討。価値観やライフスタイルも大きく変化、報酬のあり方を再考し、役割・貢献にシンプルに報いていきたい。」と話していました。

前回の新人事制度改定の時も、同じようなことを言っていたのでまたですかと思われるくらいの見直しを来年行うようです。

元々セガは年功序列型賃金でした。もちろん会社の査定

5歳あたりから頭打ちになりました。

その10年後の2017年には、新たな制度の改定がありました。その時の理由は「モチベーションアップの為」でしたが、実態は6段階評価にし、今まで標準とされていたところを無くし、査定がプラスマイナスはつきりするような制度にしました。

この時、開発の裁量労働制がなくなり、フレックス制度が導入されました。これにより開発者からかなりの不満が爆発しました。

会社はその爆発を収めようと生産性の高い方には、賞与上乘せや昇給、昇格にて処遇していく対応をしました。

どれだけ新人事制度で生産性の高い人が評価されていたのか、この対応で明らかになりました。

かになりました。

成果を上げた社員、プロジェクトに対し報いることのできる仕組みが必要だと、2021年に新たに仮運用を始め今年4月には、本格付けされた新たな制度に代わりました。

一般職は、4階層から2階層変更、年齢給はなくなり基本給一本になりました。これにより年齢による昇給というものはなくなりました。

来年考えている新たな報酬のあり方が、

会社の考えで「総額人件費を抑えたいが、優秀な人材を確保する為にはどうしても賃金を抑えられない。その分を会社が思っている、生産性の低い中高年の賃金を抑えて確保する。」などという考えであるならば、絶対に反対です。

実態は、昇格がなければ3

で賃金差が生じる能力部分もありましたが、賃金が上がらなくなることや下がることがありませんでした。労働者の経験や習熟度を前提に毎年積み上げていく評価方式でした。今の自分と同じ年齢で、その時の方の同じ年齢の給料を比べると、税金の引かれている額なども今とは違いますが、驚くほどの差があります。

2007年4月には、新人事制度が導入されました。

会社の導入の狙いは、「社員にプロ意識を強く持たせる資格体系」「資格役割に応じた報酬」「公正な評価の実施」、頑張ればどんどん報酬が上っていくなどと言われていました。

掌編小説

先輩

仙洞田一彦

首相が記者会見で「今を生きるわれわれの責任」と言った。そうだ「今を生きるわれわれの責任だ」。私の脳裏に浮かんだことは、言葉は同じでも、その後続く中身は無論、首相とは真逆のことだ。

ひらめいたところまでは良かったが、たしかになあ「われわれの責任だアアア」ナアア……後期高齢者というんだから、今の時代では年長の部類……。言葉を繰り返しながら、だんだん曖昧になる。あんまりはつきり言うと、自分に責任が突き刺さってくる。自分は責任から逃れたい。体が言うことをきかなくなった

高齢であることを理由に、かんばんしていただきたいのだが。

私より十歳くらい年上の先輩のことを思い出した。空襲下を逃げまわった記憶があると言っていた。

十年くらい前のこと。居酒屋で二人掛けの席で向き合って飲んでいた時だ。だからその時の先輩は、ちょうど今の私の年齢と重なる。何かの集まりの帰りで、降りる駅が一緒、帰り道も途中まで一緒。人通りの少なくなった路地にポツンと赤ちようちんがぶら下がっていた。

「寄って行きましょう」先輩が誘った。後輩の私にも、先輩は丁寧な言葉を遣う。言葉遣いからすると、私の方

が先輩のように聞こえるかもしれない。先輩後輩といっても、職場も違うし、どこかの学校で一緒だったのでもない。歳の違いだけだ。出会いは、何かの集まりで一緒だったのか、誰かから紹介されたのか忘れてしまった。それ以来のお付き合いだ。

「はい」夜の九時ごろ。帰ってする用事もないので同意して、暖簾をくぐった。

酔いが回れば、会話の内容はいつもと同じ。結論も同じ。でも、繰り返しにしても、二人の間には何の抵抗もない。先輩は年齢のわりには髪がふさふさしていて、傍から見れば私と同じくらいに見えるかも知れない。

「私はね、死ぬまで川柳を作

り続けますよ」

先輩が言った。先輩は川柳の同人をやっていた。年に五回くらい発行される、十数ページの手作りの薄い雑誌を私にも送ってくれる。先輩は、鋭い政治批判がこめられた川柳を、毎回載せている。とはいっても私は、先輩の川柳以外はざっと見るだけで、あまり熱心な読者とはいえない。

先輩の川柳は鋭いだけでなく、読んだ私も励まされる中身だ。——死ぬまで作り続ける——先輩の言葉には固い決意が込められている。もしかすると私に、そう言うことで、自分の川柳に対する決意を固めているのかもしれない。他人とはいっても、知っている近い人に宣言することは大事だ。誓いの言葉同様、言ったから

には守らなければならぬ。

これまで何回も一緒に飲んだことがあるが、先輩は真面目な人柄だ。長く生きていれば、当然様々な人と向き合う。

その中で、身を守るための知恵が付いてくる。こいつは油断のならない奴だとか、この人は信用できるとか判断できようになる。飲めば決まりきった話題のようだが、先輩と話していると励まされる。

その時からいくらか経っていなかったのではないかと思われる。送られてきた雑誌に、先輩の名前がなくなっていた。巻末に同人の消息が掲載されているが、そこにも名前がなかった。ということは亡くなったわけではないし、同人を辞めたわけでもなさそうだ。ただたんに先輩が川柳を作ら

なかったということだ。しかし、どんなことがあっても川柳を続けると言った先輩だ。ちよつと信じられない。何があつたのだろうか。

次の号にも先輩の川柳はなかった。

付き合いは比較的長かつたものの先輩の住所は知らなかった。雑誌に同人の連絡先があつた。電話してみると、病気が、怪我が判然としないが、そのいずれかで、とにかく作品が届かなくなつたらしい。年齢が年齢だから認知症ということも考えられるが、電話の話ではそうでもなさそうである。

あの先輩なら病床にあつても川柳を作り続けるだろうと思つていた。やはり、病気が

怪我が分からないが、その先輩の意思を挫くような状態なんだろうと想像せざるを得なかつた。誌面から名前が消えてもう十年も経つ。

あの先輩の意志よりもはるかにだらしない私が、挫けてしまうのもやむを得ないことだ、と合理化する。

ここにきて身体に一気にガタが来た。思い当たることと言え、先月の尿閉の苦しみだ。あの苦しさ、痛みが、何とかここまで無事にやってきた身体全体に衝撃を与えた。

飛蚊症というのだろうか。もう十二月というのに蚊が飛んでいる。見えない蚊が見えるのだ。目の衰えだ。この間の晩など、カメムシが飛んできた。あの三角形と楕円形を組み合わせてような虫だ。そ

れが蛍光灯カバーの縁に止まつた。蠅叩きを取つて、カメムシを叩いた。確かに叩いたが、見当たらない。テーブルの上を探しても、床を探しても見当たらない。蚊の大きさならともかく、カメムシだ。あんなに大きいものが目の中で飛ぶのか。飛蚊症ではなく

飛カメムシ症か。冗談じゃない。たしかに叩いたはずだが、蠅叩きでたたいたのはまぼろしだったのか。飛蚊症ではなく、もつとひどい目の病気か。目の病気じゃなくて、脳の方にまで来ているのか。不安になつた。

歳だから仕方ないか。そう思つて見上げて見ると、蛍光灯カバーの中をカメムシが歩いていた。叩き落したつもりが、落ちていなかった。飛カ

メムシ症ではないとホツとしたものの、蚊は依然として飛んでいる。

それから数日。りんごや柿、ミカンなどを食べやすいように切つてあるカットフルーツとかいうのを買ってきて、りんごをフォークで差して口に入れ、数度噛んだ。口の中でりんごではない何かと一緒に動く。口の中のをそうつと、手のひらに吐き出した。

この間からグラグラして、いつ抜けるかと思つて、歯が出て来た。痛みも何もまったく感じないで、抵抗なく出て来た。この抵抗のなさが不安を助長する。自分の歯さえ、しっかりと固定できなくなった肉体を思う。

先月は尿閉の苦しみ。これが起爆剤だ。そして蚊、そし

てカメムシ、そして歯と続くと気力が萎える。今を生きるわれわれの責任などとても果たせそうにない。続く時は続くものだ。

私は甘いものが好きだ。ピーナツチョコレート。この食感は何とも言えない。何も考えずに噛み砕いていたら、これも口の中に違和感。チョコレートとピーナツに混ざつて、歯にかぶせてあつた金属が出て来た。歯医者から固いものには気を付けるように言われていた。それを忘れていたことにもショック。自分の愚かさ、うかつさを嘆いても仕方ないが、生きる気力が失われる。

もう今年限りで観劇を止めようかと思つている。目もダメなら耳もだ。セリフが分か

らないのだ。声は聞こえるが、言葉を判別、識別、聞き分けられない。六割か、五割のセリフの意味が分からない。だから芝居が面白くない。当たり前だ。これも老化現象。

死ぬまで生きるのは当たり前だろうが、今を生きるわれわれの責任を果たせなんて言われてもなあ。

「私はね、死ぬまで川柳を作り続けますよ」

あの時先輩が言ったのはちやうど今の私くらいの年齢。今の私には、先輩のよう言う元気はない。

後一週間で正月。川柳雑誌の正月号が届いた。また載つてないだろうと、期待する気持ちを抑えて開いたら先輩の名前があつた。

並べられた川柳から推測す

ると、車椅子の生活になつたようだ。今を生きるわれわれの責任で平和を守らなければ——そういう主題の川柳が並んでいた。まじめだ、真面目。よみがえつたぞ。

椅子の背もたれに背をあずけ、ひとり万歳するつもりで、両手で持った雑誌を高く上げた。腰に痛みが走つた。